

〔論文審査結果〕

論文提出者：張 紹鐸

審査対象論文：国連中国代表権問題をめぐる国際関係(1961-1971年)

論文審査委員：宇野重昭教授、有賀貞教授、鹿錫俊教授、別枝行夫教授
井上治教授、李曉東准教授

【内容】

論文審査委員会の結果、博士論文としてレベル以上と評価された。なお、歴史観、価値意識が不足との指摘もあったが、資料の開拓を第1義とする外交史の研究としては優秀と認定された。

○口頭試問の結果の要旨

前半は公開試験の形で行なわれ、学外審査委員としては有賀貞教授（文書提出）、鹿錫俊教授が参加した。政治学、経済学、思想史、地域研究など様々の見地から質問されたが、論文提出者は資料に立脚して、ほぼ適切に回答したものと認められる。

○最終試験結果の要旨

論文の内容が必ずしもアメリカを主題としたものではなく、国連における中国代表権問題と国際関係（国際環境）が中心であるとの指摘がなされ、論文の正式提出時（国会図書館等）に再考すべきであるとの条件の下、博士論文として学会に貢献し得るものとして合格と認定された。

○審査委員会の所見

この論文は、1961年から1971年にかけて重要な外交問題であった“国連における中国代表権問題”を、冷戦の前半期から後半期にかけての転換期にそくし、アメリカ、中国、日本、台湾等の資料および文献を、広い範囲にわたる調査・研究に基づいて取り上げた初めての包括的研究である。

台北の資料を用いて国民政府・蒋介石との交渉を克明に描いている点が大きな特徴であるが、中・米・台の対アフリカ外交や、イタリアのアイディアに端を発したいわゆる「研究小委員会」案と米加・米台関係を取り上げるなど、随所に独自性が見られる。そして全体を通してアメリカの歴代の大統領による外交政策の変化過程がよく浮き彫りにされている。とくに冷戦の転換期の観点から、ニクソン政権の対中国政策の特徴に関し、従来のアメリカの「2重外交論」よりアメリカの対中接近の基本的動向の変化の意義を外交史論的に意味づけ、国民政府の国連における議席問題は表面上「重要問題」としながら、実際はそ

の問題がニクソン政権の政策として意義を失っている点を指摘しているところは興味深い。

著者はこの論文を四つの事例研究から構成されているとして、政治学的アプローチによる研究を指向しているが、その全体的構成を明確にすべき序論は必ずしもその論理を明確にしておらず、全体はむしろ重要な外交局面に焦点を合わせたマルチ・アーカイバル・アプローチによる典型的な外交史研究となっている。その意味で本論文は外交史研究として評価されるべきであろう。

本論文が外交史の論文として現段階における外交資料を可能な限り駆使している点、台北外交の特徴をはじめて明確に折出している点、アメリカ外交分析としても優れた業績と認められる点などを考慮すると、博士論文として、一般の水準を十分超えたものとして評価する。